発達理論の学び舎

Back Number: Vol 72

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

1421.【北欧旅行記】オスロにて

1422.【北欧旅行記】ムンク美術館を訪れて

1423.【北欧旅行記】オスロ国立美術館を訪れて

1424.【北欧旅行記】ノルウェー西岸の街ベルゲンへ向けて

1425.【北欧旅行記】Σ∞

1426.【北欧旅行記】ノルウェーの雄大な景色から：幸福に至るシンプルな道

1427.【北欧旅行記】夏の雪景色

1428.【北欧旅行記】ベルゲンで思う冬：越冬のその先に

1429.【北欧旅行記】ベルゲンの二日目の朝：ムンクの内省的日記について

1430.【北欧旅行記】コーデー・ベルゲン美術館：エドヴァルド・ムンクとニコライ・アストルップの作品より

1431.【北欧旅行記】ベルゲンでの三日目の朝

1432.【北欧旅行記】エドヴァルド・グリーグ博物館へ向けて

1433.【北欧旅行記】エドヴァルド・グリーグの熱量に引き寄せられて

1434.【北欧旅行記】「妖精トロールの住む丘」に建つエドヴァルド・グリーグ博物館より

1435.【北欧旅行記】あるのは熱情、ただそれだけを持って最後の日まで

1436.【北欧旅行記】ベルゲンでの最終日の朝に

1437.【北欧旅行記】エドヴァルド・グリーグとエドヴァルド・ムンクの共通点

1438.【北欧旅行記】コペンハーゲン空港から：自由自在な作曲へ向けて

1439.【北欧旅行記】北欧旅行の帰路に思うこと

1440. 複数の表現形式で自己を著述し続けること

1421.【北欧旅行記】オスロにて

オスロでの二日目の朝を迎えた。旅行前の天気予報では、コペンハーゲンにせよオスロにせよ、雨に見舞われることが予想されていたが、実際には晴天が続いている。天候に恵まれる運の良さには本当に感謝しなければならない。自分が移動するごとに滞在先の天気が変わっていくかのように天気に恵まれる。なんと有り難いことだろうか。

オスロでの二日目も晴天であり、今日はムンク美術館とオスロ国立美術館を訪れるため、晴れであることが何よりも有り難い。少し早めにホテルを出発し、ムンク美術館までの道のりをゆっくりと堪能したい。

現在宿泊しているホテルは、オスロ中央駅からほど近いことを昨日の日記に書き留めていたと思う。オスロ中央駅はかなり大きく、それでいて非常に綺麗だ。駅の中にあるお店はどれも清潔感があることは、この駅に対する印象を良いものにしている。コペンハーゲン中央駅は外観を含め、歴史を感じさせるものであったのに対し、オスロ中央駅はモダンさを体現している。

今朝はいつもより遅めの七時前に起床し、八時過ぎにホテルの一階のレストランで朝食を摂ることにした。端的に述べると、この朝食がとても素晴らしかった。レストランの内装の清潔さとビュッフェの食べ物の豊富さは、とても満足のいくものだった。オーガニックのスムージーやノルウェー産の新鮮なサーモンなどを朝から堪能することができた。今日も昼食を摂ることはないだろうから、朝食をできるだけしっかりと摂り、小腹が空いた時のためにゆで卵を一つほど持ち帰ることにした。

朝食を済ませて自室に戻ると、少しばかり昨夜の夢について思い出していた。旅行中は様々な情報が無意識の世界に投げ込まれるため、旅行中に見る夢は何かと印象的なものが多い。昨夜は、小さなプールのような容器に熱湯が張られており、巨大な鍋で何かを煮ている夢を見た。その鍋の近くに、オランダ人の友人の男女がおり、彼らとこの鍋の煮方について話をしていた。

ちょうど私の横に大学時代の日本人の友人が現れ、オランダ人の二人の友人に対して、彼は片言のオランダ語で話しかけようとしていた。その様子を見た時、片言のオランダ語で話しかけるぐらいならしっかりとした英語で話しかけた方がいいのではないかという思いがあったが、それを口に出すことをせず、友人と彼らが話をしている様子を傍で見ていた。

私はその鍋に集中しようとしており、どうすれば鍋の中身をうまく煮ることができるのか考えていた。すると、そのオランダ人の友人の女性が、鍋のふちに足をかけながら煮ると良いのではないかと提案をした。その時の私は裸足であったが、裸足でも鍋のふちは熱くないと彼女が述べるので、鍋のふちを少し触ってみると、やはりとても熱かった。鍋のふちにしばらく足を付けていると間違いなく火傷してしまうだろうと思った。

鍋の中で何が煮えているのか結局最後までわからず、グツグツと何かが煮える様子をただただ見守っていた。夢から覚める直前に、この鍋がひっくり返る様子や、鍋を煮るプールのような容器の中に誤って転落したらどうなってしまうだろうか、という恐ろしいことを想像していた。そこで夢から覚めた。

この夢が何を象徴しているのかは全くもって不明である。自室のカーテンを開けると、早朝のオスロに降り注ぐ朝日が顔を覗かせていた。2017/8/11(金)

No.66: Emerson's Philosophy of Education

Ralph Waldo Emerson provided an insightful remark that: "Books are good only as far as a child is ready for them." Emerson was a sagacious educational philosopher. I think that readiness is a key not only for children but also for adults to learn.

Emerson gave another perspicacious comment that nobody can learn what he or she does not prepare for learning even though it is near to his or her eyes. Educators should grasp the readiness of each learner. Friday, 8/18/2017

1422.【北欧旅行記】ムンク美術館を訪れて

早朝、朝食を済ませて少し休憩をしてからホテルを出発し、ムンク美術館に向かった。今日は昨日以上に良い天気であり、朝から太陽の光りがオスロの市内に降り注いでいた。早朝は半袖では肌寒かったが、ムンク美術館に到着する頃には体が温まるだろうと思いながら美術館に向かう。昨夜調べてみると、オスロの街は東京に続いて、世界で二番目に物価が高いことを知った。確かにこの街の物価は高いのかもしれないが、中心街を離れて少し郊外に行けば、とても住みやすい住環境が広がっていることがわかる。どうやら私は、オスロの街に対して好意的なようだ。

ムンク美術館に向かう最中、街の大通りから離れた道を歩いていると、この街の人々の生活の様子を少しばかり垣間見ることができた。八百屋や床屋など、この街の市民が日常足を運ぶ店を眺めてみると、世界のどの場所においても人間の生活の様子はさほど変わらないことに気づく。

ムンク美術館に通じる道へ向かって左折をすると、その道は緩やかな坂道になっていた。坂の頂上の左側に緑豊かな公園が見え、坂の右横がムンク美術館だ。開館から数分ほど遅れて到着すると、すでに少しばかり列ができていた。だが、チケットの購入にそれほど待つこともなく、比較的速やかに入館することができた。他の美術館ではあまりお目にかからないが、ムンク美術館では手荷物をロッカーに預けた後、空港のセキュリティのようなゲートをくぐる必要がある。それほどまでに警備が厳重だ。

ムンクといえば、『叫び』という名前の作品がすぐに思いつくだろうが、それはこの美術館には所蔵されておらず、それはオスロ国立美術館に所蔵されている。館内で中国人の家族が、その作品がムンク美術館に所蔵されていると思っていたらしく、係員に尋ねているところを偶然見かけた。事前によく調べていなければ、その中国人だけではなく、その他の多くの人が同じ思い込みをしているのではないかと思う。

ムンク美術館に所蔵されている作品の中で、私を捉えて離さなかった作品は二つほどある。一つは、館内に入ってすぐのところに飾られていた『太陽』という作品だ。ムンクは太陽をモチーフにいくつか同じタイトルの作品を残しているようだが、私が身動きできずに捕まえられた作品は1910年から1913年にかけて制作されたものだ。

これも何かの縁だろうか、昨日私がオスロの街中を歩いている時に目撃した「存在の輝き」を体現しているような迫力に満ちた太陽が鮮やかにその作品の中に描かれていた。モチーフの太陽は、この世界の全ての存在に光を与え、全ての存在の魂を光り輝かせるかのような印象を与えた。この作品をずっと見ていたかった。幾分時を忘れ、時間感覚が喪失した世界の中に私はいた。

本当に自分を打つ作品、自分の魂と共鳴するような作品に出会った時、私たちにできることはただ一つしかない。それは写真で撮影するなどという馬鹿げたことではなく、ただその場に立ちすくんで自己の全てを明け渡すことだけだ。そこでは自らの魂さえ明け渡すことになるだろう。だから時の感

覚も空間の感覚も消失するのである。小さな自己は完全に滅却し、作品の奥の奥にある作品の魂の中に私たちは溶け込んでいく。

ふと我に返ったとき、「我に返った」という表現ほどその状態を表す正確な描写はないだろうと思わされた。我を手放し、我を預け、再び我に返ってくるのである。自己と作品との本当の出会いというのはそのような状態を指すのであり、それを経験した前後の自分は同一のものではないことがわかるだろう。ムンクの『太陽』という作品は、私にとって忘れられない大切な作品となった。

もう一つ自分を捉えて離さなかったのは、ムンクの二枚の自画像である。一つはムンクの青年期の姿を描いたものであり、もう一つは晩年の姿を描いたものだ。両者の作品は、美術館の出口に近いところに飾られていた。この作品の何に惹きつけられているのか、正直なところ最初はよくわからなかった。なぜなら、それらは一見すると何の変哲も無いと思われる二枚の自画像だからだ。

館内でこの作品を熱心に眺めていたのは私だけだったかもしれない。それほどまでにこの作品の前に私はずっとたたずんでいた。この二枚の自画像から私が感じ取っていたのは、一人の表現者としてのムンクの成熟の歩みだった。

青年期から晩年にかけてムンクが辿ってきた長い歴史の重みが、両者の作品の間に横たわっているかのように感じられた。ムンクという表現者は、第一次世界大戦と第二次世界大戦という激動の中を生き、絶えず世界と向き合う中で作品を作り続けた人間だった。ムンクの生き様の全てが、二つの自画像とその余白に込められているような気がしてならなかった。ムンク美術館の出口から外に出た時、真夏の太陽に照らされた新緑の木々が踊っているかのように見えた。2017/8/11（金）

No.67: Refined Simplicity for Sophistication

──Simplicity is the ultimate form of sophistication──Leonard da Vinci

Elegant simplicity extracts from sophistication, but mere simplicity may not generate sophistication. Refined elegance requires sophisticated simplicity. My aspiration is to keep my writing and music composition as elegantly simple as possible. Saturday, 8/19/2017

1423.【北欧旅行記】オスロ国立美術館を訪れて

ムンク美術館を後にし、オスロ国立美術館に向かった。この美術館は、絵画や建築などの分野によって建物が異なっており、今日私が足を運んだのは絵画作品を所蔵する美術館だ。ここにはムンクの代表作である『叫び』や『マドンナ』が所蔵されているほか、ピカソやモネなどの作品もいくつか所蔵されている。全体を通じて見所の多い美術館だという印象を受けた。

ただし、私が最も感銘を受けたのは、そのように有名な作品ではなかった。最も印象に残っているのは、ノルウェーの画家が描いた一つの作品だった。その絵の主題は、ある農民の家族の葬式である。葬儀の場所は、小高い山を背にした平野の一角であり、ある人物が埋葬された場所に8人の人間が集まっている。

数人の男性が、悲しげな表情を浮かべながら埋葬場所をうつむき加減に見つめている。埋葬された人物が安らかな眠りにつけるようにするためだろうか、一人の若い男性が小さな手帳のようなものを持ち何かを読み上げている。その横に、白い頭巾をかぶった年寄りの女性が立っている。この絵の中に、人間の一生の全てが描かれているような気がした。

コペンハーゲンのニイ・カールスベルグ・グリプトテク美術館でも感じたことなのだが、作品のモチーフとなった実際の過去に生きていた人々の生活や生き様を考えることを余儀なくされることが頻繁に訪れる。それは突発的なものであり、それらの人々の人生をその場で再体験しているかのような感覚を引き起こす。まさに一昨日のコペンハーゲンの美術館で目撃した作品は、今から200年以上も前に描かれたものでありながらも、その主題となっている人物がとても近しい存在に感じたのだ。

200年というのは確かに長い年月かもしれない。だが、その作品を見たときに感じていた時間の近接性をどのように説明したらいいのだろうか。その作品の人物が今この瞬間に生きていても全く不思議ではない生命力。作品に宿る命のようなものを私はずっと感じていた。

そうした長大な時の重みに耐え、現代においてもなおその生命力を失わない作品を前にした時、自分の仕事のあり方を再度捉え直さざるをえなかった。今日のオスロ国立美術館で見た葬儀をモチーフにした絵画もそうだった。その作品は、一人の人間の肉体的な命が尽きたことを描いている。だが、そこには尽きない命が確かに宿っていた。

© YOHEI KATO 2018

一人の人間が生み出す表現物には、これほどまでに命を感じさせる力を込めることができるのだ。ここで私はもう一度、表現物の再定義をしなければならない。また、表現物を生み出す方法についても再度根底から見つめ直さなければならない。

美術館にある作品を眺めている最中、私の頭の中は自らの表現物に関することで一杯だった。ここからまた歩き始めたいと思う。この世界で日々生きることが絶えざる出発であるならば、今日この場で大きな出発を新たにしたいと誓った。

美術館を出ると、夕方のオスロはまだ日差しが強かった。自分の中の太陽を見つけることができるだろうか。そして、その太陽の光を必要とするべき人や場所に届けることが自分にできるだろうか。オスロという街が、自分を励まし、再出発を促す大伽藍のように映った。2017/8/11(金)

No.68: Celebration Rain for a New Day

It is raining from the dark sky in the early morning. The rain looks like a gloomy march. The view of the surrounding from my study is nearly equal to the scenery in the end of the world. However, it does not urge a hopeless and forlorn feeling. In fact, the opposite is true; the rain is a shower of celebration for a new day in the world. I can feel the rain as an auspicious gift. Saturday, 8/19/2017

1424.【北欧旅行記】ノルウェー西岸の街ベルゲンへ向けて

早朝の五時半に起床し、今日はいよいよノルウェー西岸の街ベルゲンに向かう。ホテルの室内が乾燥していたためか、昨夜は喉が少し痛かった。水分を多めに取りながら睡眠をし、深夜に目覚めた時も水分を取るようにしていたことが功を奏してか、早朝においては随分と喉の痛みが軽減された。しかし、まだ少しばかり痛みがあることは確かなので、ベルゲンでのホテルにおいても乾燥には気をつけなければならない。また、昨日のオスロ市内の早朝の気温が低く、そうした中を半袖で過ごしていたことも何か影響があるかもしれない。ベルゲンはさらに気温が低いので、できるだけ温かい格好をしたいと思う。

いよいよ今日は待ちに待ったベルゲンへの列車の旅が始まる。オスロ中央駅を8:25に出発する列車に乗り、14:57にベルゲンに到着する。およそ六時間半ほどの列車の旅だ。とにかくオスロからベルゲンに向かう列車の車窓から見える景色に目を凝らしたいと思う。それは今回の旅の中でも最大の楽しみであり、ノルウェーの雄大なフィヨルドや深い森を見て、自分は何を感じるのだろうか。

列車の中では景色を眺めることに加え、読むことと書くことを行いたい。読むことに関しては、引き続きエマーソンの全集に取り掛かり、列車の乗車時間を考えれば、今日は随分と読み進めることができるだろう。また、昨日にムンク美術館を訪れた時、ムンクの作品集や詩集──ムンクは絵画のみならず詩や小説も書いていた──、そしてムンク美術館に関する書籍を購入したため、エマーソンの全集を読む合間合間に、ムンクに関するそれらの書籍の中のどれかに目を通したいと思う。

昨日はムンク美術館に足を運んで本当に良かったと思う。これまではムンクの代表作の『叫び』ぐらいしか知らなかったが、ムンクのその他の作品を数多く見る機会に恵まれたことによって、ムンクの芸術家としての思想がどういったものなのかを随分と掴むことができたように思う。

昨夜もムンクの詩集に目を通していると、彼の人となりや生き方に大変共感するものがあった。そうしたこともあり、ムンクは今の私の関心を大きく引いているのだと思う。

ムンクもエマーソンと同様に、自然を愛した人だった。オスロからベルゲンにかけて広がる自然をムンクも一度は見たことがあるのかもしれない。ムンクがノルウェーの雄大な自然から霊感を受け取り、それが彼の芸術家としての活動を大いに支えていたことは間違い無いだろう。これから私も列車の旅を通じて雄麗な自然の中に入り、ムンクがノルウェーの自然から得たものと同じようなものを得ることができるかもしれない。

オスロに滞在した二日間において、私はこの街から実に多くのことを授かったように思う。オスロにはぜひまた足を運びたいと思う。その日が来るまで、今日もまた歩き出したい。2017/8/12（土）

No.69: New Inner Eyes

──The real voyage of discovery consists not in seeking new lands but seeing with new eyes──
Marcel Proust

After I came back from Northern Europe, it seems that my inner eyes transformed into new ones. I can detect a subtle difference between my previous and present inner eyes. The subtle transformation empowers me to see the reality in a novel way. It is as if I were in a new dimension of reality. Saturday, 8/19/2017

1425.【北欧旅行記】Σ∞

オスロでの最後の朝。ホテルの朝食をしっかりと摂り、予定摂りに八時ちょうどにホテルを出発した。今日は雨の予報だったが、またしても天気が変わり、雨に見舞われることがなかった。道路の様子を見ると、どうやら深夜に雨が降っていたようだ。

ベルゲン行きの列車が出発するのは8:25であり、十分に余裕を持ってプラットホームに着いた。プラットホームにはすでに乗車予定の列車が待機しており、チケットに表示されている車両にすぐに向かった。乗車する車両は最後尾であり、先頭車両からそこまで辿り着くのに少々時間がかかったが、列車に乗り込み、自分の席を見つけた。列車は予定どおりの時刻に出発し、いよいよベルゲンに向けた列車の旅が始まった。

オスロ上空は曇りがちであったが、しばらく列車に乗っていると、幸いにも晴れ間が広がってきた。車窓から綺麗な河川が見える。その河川を囲むように濃い緑が見える。

エマーソンの全集をおもむろに開き、いくつかの章を読み進めていると、気づかないうちに一時間ほどの時間が経った。顔を上げ、景色を眺めると、昨日のオスロ国立美術館での出来事を思い出した。

美術館の作品を案内順に鑑賞していると、一つの部屋に行き着いた。そこはデッサンを体験する部屋だった。部屋の中央に、男の子とその母親の彫像が立っていた。母親の彫像が小さな男の子を抱擁している様子を表している。部屋の壁には、ここでデッサンをした人たちの作品が至る所に貼られていた。滅多に絵を描かない私でも、どういうわけかここでデッサンをしたいと思った。そう思わせてくれる環境からの働きかけがあったのだ。

二つの彫像を斜めから見える位置に腰掛け、デッサンボードに画用紙を挟み、鉛筆でデッサンを開始した。デッサンというのは、おそらく対象をありのままに描くことを意味するのだろう。だが、デッサンを開始しようとした瞬間に、私の眼には、左側の男の子がΣ記号に見え、男の子を抱く右側の母親が∞記号を縦にした姿に見えた。そのため、自分の眼に見えた通りにそのまま表現した。

熱心に鉛筆を走らせ、目の前の具体的な人間を表した彫像を見ながら二つの記号を描いていった。最終的には「Σ8」のようなシンボルが画用紙の中央に大きく描かれ、Σの角が子供の柔らかさを表していないと思い、δ記号をΣの尖った部分に小さく配置していった。

20分ほどデッサンに熱中し、いつの間にか作品が完成していた。今日の日付、自分の名前、そしてどこから来たのかを明記し、自分の作品も壁に貼り付けようと思った。100枚近くの作品があっただろうか、全ての作品を眺めてみると、絵画のプロが描いたようなデッサンがいくつかあった。一方、幼い子供が描いたような可愛らしい作品もいくつかあった。

ただし、全ての作品に共通していたのは、部屋の中央に置かれていた二人の具体的な人間をそのままデッサンしていたことだった。100枚近くの作品のうち、抽象的なシンボルでデッサンをしていたのは私だけのようだった。その瞬間、部屋の隅に腰掛けてデッサンを始めようとした私は、肉体の眼ではない眼で二つの彫像を眺めていたことに気づいた。

Σ記号の右横に∞記号を配置したことの全体の意味は、無限を無限回足し合わせるということだった。実際の数学的な操作では、無限に無限を足すことは許容されていないと思う。母親の無上の愛が無限を表し、その男の子と母親との絆が足し算を表していたのかもしれない。

デッサンを終えてその部屋を後にした私は、何か大きなものに包まれながら途方もない場所に向けて歩き出している感覚があった。2017/8/12（土）

【追記】

上記の日記を読んだ後にふと思ったのは、オスロ国立美術館でのデッサンの体験が大きなきっかけとなって、毎日絵を描くようになったのかもしれないということだった。もちろん、この体験だけが理由なのではなく、それまで蓄積した体験があってこそだと思うのだが、上記の美術館でのデッサン

の体験が重要な要因であることは確かだろう。今となっては自分が毎日絵を描くことは習慣になっているが、そもそもこの習慣を形成してくれたのはノルウェーでの体験が大きかったのだと知る。フローニンゲンに向かう列車の中：2018/9/15（土）14:10

No.70: Vitality and Eternity

I slept very well last night, and my vitality for work is fulfilled. The exterior world is also beginning to awake. The symphonic various sounds of nature tells the beginning of today. Riding on the waves of the symphony, I will read and write, read and write, and read and write today.

Today will end, and a “new today” will come again. Our days are the continuity of everlasting today. That is why we are living in the eternal and timeless world. Sunday, 8/20/2017

1426.【北欧旅行記】ノルウェーの雄大な景色から：幸福に至るシンプルな道

紫色や黄色、そして赤色の野花が咲く山道を列車がゆっくりと進んで行く。左手には美しい湖が見え、その湖を森林に次ぐ森林が優しく抱きかかえている。いや、ここには抱擁するものとされるものという二元論的な関係はなく、二つがあって一つの景観を生み出しているのだ。湖の湖面に朝の太陽光が反射し、湖も森林も、太陽も野花を含め、それら全てが息を飲むほど雄大な一つの景色を生み出している。

何という雄大な景色だろうか。できることならこの雄大な景色の中に溶け出し、この絶景の全体の部分として自分も加わりたいと思った。この壮大な景色を眺める以外にすることが見当たらないかのように、私は目の前に広がる景色に釘付けであった。自分が景色と一体となり、再び景色から分離したとき、時計の針が幾分進んでいることがわかった。

そこで私は、この雄大な景色の部分として加わる願いが成就されたと思った。いや、この景色を構成する部分になれただけではなく、私も目の前に広がる景色全体に他ならないのだと思った。さらに、そもそも私は、この雄大な景色といついかなる時でも本質的に一つだということに気づいたのである。景色と自分という境界線を引くのは、この私に他ならない。その境界線を書き換えることができれば、あるいはそれを取り払うことができれば、私はいつもこの景色に他ならないのだ。

思考と言葉による境界線構築運動を少し止めてみる。認知世界に張り巡らされた境界線の網の目を解きほぐし、目の前の自然の中に完全に自己を溶け込ませてみる。この景色の中にずっといたいという感覚。この自然の中にずっといたいという感覚に満たされる。すると、この感覚はここ数日間に何度か体験したものと同じだと思った。

それは、自分の魂と共鳴する絵画作品を前にした時の感覚だ。一つの絵画作品に存在を鷲掴みにされ、作品の前でただ立ち尽くし、全てを明け渡すあの感覚。作品の中にずっと留まっておきたいというあの感覚と全く同じなのだ。自然の中ではなく、絵画の中でもなく、自然と絵画と完全なまでに同一化する感覚と言った方が正確だろう。

とにかく自分の全てを手放し、全てからの解放を通じてそれと一体になるのだ。そこで初めて、私たちは自己の本質である自らの魂を見出すだろう。

いかに自分が自らの魂と切り離された形で日常生活を営んでいたかに気づかされる。普段私たちがいかに自然から分離され、自らの魂と分離した状態で生きているかに気づかされる。多くのことはいらないし、難しいことはいらない。境界線を引こうとする衝動を緩め、ただ心を落ち着かせて全てを手放し、その瞬間のその場に全てを委ねてみるのだ。指示はそれだけである。

エマーソンの思索的エッセイもムンクの絵画も、究極的にはその指示を通して同じことを伝えようとしているに違いない。幸福に至る道はそれほどまでにシンプルなのだ。2017/8/12（土）

No.71: A Tentative Plan for Diary-Like Composition

Yesterday, I came up with a new idea about how to compose music. I will make every endeavor to enable my music to capture and represent the nuances of my thoughts and feelings. The first step would be to let my music distinguish a subtle difference between various adjectives with the same meaning such as joy, jubilation, exultation, exhilaration, ebullience, elation, and so on.

I will never forget to give each piece of music a name and creation date. After I create at least 10,000 measures, I can see my progress to express my inner phenomena as music. Sunday, 8/20/2017

1427.【北欧旅行記】夏の雪景色

オスロを出発してから四時間ほどが経った頃、景色が一変した。濃い色の湖からエメラルド色の湖に変わった。森林に覆われた山々が幽玄な禿山に変わった頃、辺りに雪景色が広がった。

今の季節はいつだろうか？確かに夏だ。冬の先取りか冬への後戻りか、私はしばし夏を忘れた。薄い靄が辺りを包み、その中に雪の残る山々が荘厳にそびえ立っている。湖の脇にある山道にはどこまでも続くサイクリングロードがあり、自転車に乗って山道を進む人たちの姿が時折見える。このような雄麗な景色の中をサイクリングすることはどれほど爽快だろうか。

オスロを出発した頃の外気は10度後半であったが、今は8度を示している。列車で相席となったノルウェー人の家族が、終始仲良く話をしている。祖父母、両親、そして三人の娘たちが旅の思い出を一緒に作っている様子はとても微笑ましい。一番下の女の子は10歳ぐらいで、終始好奇心に溢れた目を輝かせながら、両親や祖父母に何か質問している。

私はノルウェー語は一切わからないが、その女の子の質問や発言が家族全体を和ませていることだけはわかった。私はてっきり、途中で相席となったこの家族とベルゲンまで一緒になると思っていたのだが、先ほどの雄大な景色の見える駅でこの7人の家族と別れた。

ベルゲンまであと二時間ほどとなった。この先どれくらいこの景色が続くのだろうか。そのようなことに思いを巡らせていると、みぞれのような雨が降り始めた。山の中腹にある一つの駅に到着した時、乗り換えのためか、列車がそこで数分間止まった。その間に何人かの乗客が窓側に集まり記念撮影を始めた。

この先に待つベルゲンはどのような街なのだろうか。事前にこの街について調べていたが、そうした知識的な関心ではなく、体験的かつ感覚的な好奇心をこの街に寄せている。

山と山の間から滝が姿を現し、それが流れの急な川を作っている。白い水しぶきを上げながら、川は上から下に流れていく。この流れは下から上には流れない。それは一つの自然法則だ。滝が流れ落ちていく様子は、一者に向かおうとする上昇的なあり方を緩めてくれる。一者から多者に向かっていく下降の道を忘れてはならない。

© YOHEI KATO 2018

山というのは登ることが難しいのではない。実は山から降りることが難しいのだ。いかに山から降りるかは、誰もが考えなければならないことではないだろうか。絶えず上昇することを私たちに突きつける現代社会において、山への登り方を説く情報は枚挙にいとまがない。しかし、自分の山へ登り、そこからいかに降りてくるかを説く教えはほとんどないことを改めて知る必要があるろう。

なぜ人は他者が作り上げた山へ懸命にしがみつき、そこを登ろうとするのだろうか。なぜ自分の山を見つけようとしないのか。自分の山を見つけて初めて、山へ登るという歩みが始まり、そこから初めて山を降りるという真の歩みが始まると思うのだ。

列車がノルウェーの深い森をゆっくりと、ただゆっくりと進んでいく。雪の残る禿山から再び辺りが緑色の世界に包まれる。目の前に高く高くそびえ立つ森林に覆われた山々が、自分の心の中に自分独自の山を築いていく。私は、今眼の前に広がるエメラルド色の激流のようには進めない。ノルウェーの森の一本の大木が育まれたのと同じぐらいの時間をかけ、ゆっくりと自分の歩みを続けたいと思うのだ。2017/8/12(土)

No.72: Words, Senses, and Beings

Our words encapsulate our senses and beings. People are sometimes apt to neglect words and to rely on only senses. However, it demonstrates that they devalue the worth of words and their beings because all of the three are interdependent. Words, senses, beings are one indivisible entity. Thus, modern people who are likely to count on only their senses are losing their authentic words and beings. Sunday, 8/20/2017

1428.【北欧旅行記】ベルゲンで思う冬:越冬のその先に

オスロから列車に揺られること六時間半、ノルウェー西岸の街ベルゲンに無事に到着した。ベルゲン駅はこじんまりとしていながらも、どことなくこの街の歴史を感じさせてくれる。駅から一歩外に出ると、目の前に緑豊かな公園が広がっていた。今日から三日間宿泊することになるホテルは、この公園の近くにあり、明日足を運ぶコーデー・ベルゲン美術館と眼と鼻の先にある。

ベルゲンの駅を出て右手には、小高い山の斜面に家々が並んでいるのが遠目から見える。その様子を見たとき、昨年の夏に訪れたスイスのニューシャテルの風景を思い出した。ニューシャテルは湖畔の街であり、ベルゲンは港の街という違いはあるが、その風景はどこか似ている点がある。オスロのホテルの乾燥と寒さによって喉を痛めてしまい、おかしな鼻水が出始めているので、今日は夕食を近場で済ませてゆっくり休むことにした。

三時過ぎにホテルにチェックインし、部屋で少しだけ仮眠を取って夕食を買いに街に繰り出した。ベルゲンはオスロよりも気温が低いため、三枚服を重ねて暖かい格好で街に出た。

ベルゲンと言えばやはり港が有名だろうということで、せっかくなので漁港に向かって歩き始めた。漁港の方まで観光客で溢れており、この街の賑わいを感じる。漁港の近くでは海産物の市場が開かれており、見るからに新鮮かつ美味しそうな魚介類が豊富に並べられていた。ただし、一人で海鮮料理を食べるのは少し気が引けたので、そのまま漁港を少し見て、街の中心部に引き返すことにした。

街中を歩いていても鼻水が止まらなかったので、やはり今日はホテルでゆっくりしようと思った。ホテルの近くまで引き返すと、何やら美味しそうなスープ屋を発見した。冷え切った体が暖かいスープを欲していた。店内は明るくとても落ち着いた感じであり、ここでスープと軽い物を食べていくことにした。身も心も温まるスープを飲みながら、ふと、近いうちにやってくるフローニンゲンの冬が恐ろしくなった。

先月あたりにも一度同じ体験をしていたが、先ほどの恐怖感は以前以上のものだった。実存的な孤独感の芯に届くような恐怖、と表現したらいいかもしれない。あの凍てつく寒さの冬がまた近々やってくる。旅先でこのような恐怖を感じるとは思ってもみなかった。ましてや、かねてから訪れることを楽しみにしていたベルゲンの街で。

自分にとって旅というのはもはや、何か観光名所を見るためでは決してなく、日常自分が見ようとしない心の奥底や自己の本質と否が応でも向き合うためにあるような気がしている。自分のそばに誰かがいるいないに関わらず、向き合わなければならない実存的な孤独感がある。それは奇しくもム

ンクが経験していたものと同じであるように思える。オスロでムンクの作品とムンクその人自身と邂逅を果たしたのは、やはり何かの縁であろう。

注文したスープが体の芯まで温めてくれる。これからやってくる厳しい冬を乗り越えることができるだろうか。私はあと何回冬を越していく必要があるのだろうか。

スープ屋を後にする時、店員と何気ない挨拶を何回か交わした。その店員の言葉は、スープと同じぐらいに自分の心を温めるものだった。

何度でも自分の中の冬と向き合い、何度でも冬を越していこうと思った。越冬のその先に、自分を超えた自分が待っている。2017/8/12(土)

No.73: My Passion

Composing music is similar to writing a programming code in that both of them require meticulous steps. Also, they are different from a natural language.

Composing music and writing a programming code provide me with the same exuberant feeling as writing an essay does. Since composing is a type of writing, I can say that my passion exists in writing. Sunday, 8/20/2017

1429.【北欧旅行記】ベルゲンの二日目の朝:ムンクの内省的日記について

ベルゲンの二日目の朝。昨夜はホテルでゆっくりし、早めに就寝をした。そのおかげもあってか、喉の痛みもだいぶとれ、鼻水も止まった。ホテルの乾燥や当地の気候に気をつける必要があると改めて思う。

ベルゲンで宿泊しているホテルは、オスロで宿泊したものと同じ系列のホテルであり、すでに勝手を知っている。そのため、ベルゲンのホテルに到着してからも何不自由なく過ごすことができている。やはりこのホテルの朝食は評価が高いらしく、レストランの入り口に賞を受賞した旨の看板が立てられている。今朝はそのレストランでゆったりと朝食を摂り、その後、コーデー・ベルゲン美術館に足を箱ぶ。

この美術館は、四つの建物で構成されており、それぞれある特定のコンセプトに基づいた芸術作品が所蔵されている。あいにく「コーデー2」の建物が現在は改築中であり、ここには訪れることができないため、その他の建物をゆっくり廻りたい。最も早く開館するのは「コーデー3」であるから、10時の開館に合わせてそこに向かいたい。宿泊先のホテルが美術館と眼と鼻の先にあり、コーデー3までは徒歩で3分ほどであるため、朝食後もホテルの自室でゆっくりすることができるだろう。

昨夜はホテルの自室で、ムンク美術館で購入した『叫び』に焦点を当てた解説書とムンク美術館の解説書を読んでいた。これらの書籍を読めば読むほどに、一人の表現者としてのムンクに対する尊敬と共感の念が強く溢れ出してきた。表現者としてのムンクのどういった点に尊敬と共感の念を持っているかについては、今後折を見て書き留めることになるだろう。とりわけ私は、ムンクが絵画の創作と合わせて日記を執筆していた点に注目をした。

ムンクは、エドガー・アラン・ポーやドストエフスキーらの文学者から多大な影響を受けており、テキストとイメージの統合という試みにも従事していた。私が最も感銘を受けたのは、ムンクが自分の思想や理念をどのように視覚化することができるのかを、作品を単に作りながら探究していったのではなく、日記の中で言葉による言語化を通じて探究していったことにある。

思想や理念を視覚化するというのは、ムンクにとっては絵画作品を媒介にしたものであったが、その実現の背後には言葉があったのだ。一昨日、ムンクの詩と日記が収められた書籍を読んでいた時にも感じていたが、ムンクは日記を執筆することを通じて内省を深め、自らが描こうとする主題について思想を育んでいたのだ。ムンクの作品に思想的な深さを見ることができるのは、こうした絶え間ない内省実践と日記の執筆にあったのだと思う。

ベルゲンの二日目は雨の予報だったが、今はまだ雨が降っておらず、曇り空が広がっている。少しばかり鬱蒼とした空模様だ。

今日これから訪れるコーデー・ベルゲン美術館にもムンクの作品が所蔵されているため、本日の作品鑑賞から得られたことをまたここに書き記しておきたいと思う。2017/8/13（日）

No.74: Learning Music Theory

How wonderful to represent my inner world by colorful music is. I am learning music theory by "Alfred's Essentials of Music Theory: A Complete Self-Study Course for All Musicians (2004)." Reading this book is like playing a game. Learning can be gamified.

Gamification is key to accelerating learning not only for children but also adults. To repeat reading this book at least three times would build a robust knowledge network about music theory. The fundamental knowledge about music theory is indispensable to music composition. I will read this book again and again. Sunday, 8/20/2017

1430.【北欧旅行記】コーデー・ベルゲン美術館：エドヴァルド・ムンクとニコライ・アストルップの作品より

ベルゲンでの二日目は、コーデー・ベルゲン美術館に訪れた。今日も気温が低いため、とにかく暖かい格好をしてまずは「コーデー3」の建物に向かった。この建物に所蔵されている作品の中で異彩を放っているのはやはりムンクの作品群だった。一つ印象に残っている作品がある。

それは『カール・ヨハン通りの春の日』という作品だ。この作品がある部屋の壁に飾られているのを見たとき、この作品が描かれた場所を過去に訪れたことがあるかのような感覚に襲われた。どの国のどの通りなのかもわからなかったのだが、なぜか自分もここを訪れたことがある、という確かな感覚に包まれていた。

しばらくして、私はゆっくりと後ずさりをしながら作品から少しずつ離れた。そして、部屋の真ん中に置かれていた椅子に腰掛けて、この作品を引き続きぼんやりと眺めていた。作品の右側に見える人の行列から話し声が聞こえて来る。作品の左側に見える木の前に立っている白い服を着た女の子の独り言が聞こえて来る。作品の真ん中に立っている日傘を差した女性は、こちら側に背を向けているため顔が見えないが、どこか複雑な気持ちで目の前に広がる光景を見ていたに違いない。この作品は、自分の心の中の原風景を描いているような不思議な感じがしていた。

しばらくこの作品を鑑賞した後、私はすっと椅子から立ち上がり、その場を静かに後にした。コーデー3の建物を後にした私は、その足でコーデー4に向かった。コーデー4で最も印象に残っているのは、ニコライ・アストルップというムンクと並ぶノルウェーを代表する画家の作品だった。

タイトルは『石の上の鳥』と訳すことができるだろうか、この一枚の絵を見たとき、アストルップがなぜこのタイトルを付けたのか不思議に思っていた。というのも、石の上に立っている鳥が描かれているのは、全体のうち極々わずかな部分でしかないからだ。

石が浮かぶ湖や湖の背後にそびえ立つ雪山が圧倒的な存在感を放っているにもかかわらず、なぜ石の上の鳥がタイトルになったのかをその場でぼんやりと考えていた。すると、「一は多のために、多は一のために」という言葉が降ってきた。

そうなのだ、この石の上にそっとたたずむ小鳥は、背景に描かれている全てのために存在しており、背景の事物はどれもこの石の上にたたずむ小鳥のためにあるのだ。絵画の中の小鳥が自分の仕事と無性に重なって見える。私はその場でその小鳥をしばらく静かに眺めていた。まるで小鳥が自分の心の奥底で静かに生きているかのような気がした。

その後私はコーデー4を後にし、コーデー1の所蔵品をざっと鑑賞した。ここには自分を惹きつけるものはそれほどなかった。

喉の痛みは止まったのだが、今度は身体にだるさが漂い始めた。どうやら風邪の初期症状のようだ。自分も風邪を引くのだという純粋な驚きがあり、身体のこの重さがひどく懐かしく思えた。意識もぼんやりとしているため、今日も早めにホテルに戻り、ゆっくりと過ごすことにした。ムンクの画集やコペンハーゲンの美術館で購入した“The Secret Code”を読みながら、ベルゲンでの二日目の夜を過ごしたい。2017/8/13（日）

No.75: A Dream with Two Polarities

A dream that we have every night contains a number of profound symbols and meanings. Although our dream sometimes looks preposterous, we have to unpack the rich messages behind the irrationality. A dream would be a perfect example to indicate that it is composed of two

interdependent and inseparable polarities; real and unreal, rational and irrational, etc. Whenever we regard it as unreal, it would be wise for us to think that it is real because the dream encompasses both dimensions. Monday, 8/21/2017

1431.【北欧旅行記】ベルゲンでの三日目の朝

ベルゲンでの三日目の朝を迎えた。早朝起床してみると、喉の痛みもほぼ完全に取れ、すっかり体の調子が戻っていることに気づいた。昨日は日中から体がとてもだるかったので、そのだるさが取れていることは嬉しい。今日も寒さには気をつけなければならないが、活動できるほどの状態に身体が回復したことは一安心だ。

その他にも、今日の天気が晴れであることは嬉しい限りである。昨日は少しだけ雨が降る時間帯もあったが、基本的には美術館の建物の移動だけしかなかったので、全く雨が気にならなかった。

昨日は一日中雨が降る予定だったが、雨は断続的であり、昨日の予報では今日も雨だったのだが、早朝の予報では晴れとのことである。今回の北欧旅行中、不思議なほどに天気予報が外れる。厳密には、一日単位で天気が目まぐるしく変化し、自分が街から街へ移動するたびに天気が大きく変化しているかのようなのだ。いずれにせよ、今日は観光日和だと言える。

ベルゲンでの三日目に何を計画していたかというと、ベルゲンの街から南に10kmほど下ったところにあるエドヴァルド・グリーグ博物館に足を運ぶことだった。しかしながら、よくよく調べてみると、その博物館に行くための公共交通機関がグーグルマップに表示されることはなく、歩くと片道二時間かかるという表示しかなかった。

天気予報では三日目は雨であったから、ここを訪れるのを諦めようとしていた。しかしさらによく調べてみると、ベルゲンの市内からその博物館の近くまで路面電車が走っていることを知った。

「北欧のショパン」と形容され、ベルゲンの街が生んだノルウェーを代表するこの作曲家をより深く知りたいという思いから、この博物館にはどうしても足を運びたかった。そのため、路面電車を活用して最寄駅から25分ほど歩くことにしようと思っていた矢先、昼食コンサートを兼ねた市内からのバスツアーがあることを発見した。

博物館に関する情報をあれこれ調べていると、館内に200人ほどの収容人数を誇るコンサートホールがあり、演奏舞台の裏手にはこの博物館を取り巻く湖と木立を眺めることができるとわかった。そうした環境の中でグリーグの楽曲を聴きたいと思い、この機会に昼食コンサートにぜひ参加したいという思いが強くなったため、市内からのバスツアーに参加することにした。そのため、今日はベルゲンの漁港近くにある観光案内所に行き、11時に出発するツアーバスに乗る。

そこから20分ほどバスに乗り、目的の博物館に到着する。ツアーが終わり市内に戻るのは14:30とのことであり、今日はグリーグ博物館さえ訪れることができれば満足であるため、今日も早めにホテルに戻ってくるかもしれない。あるいは、体調のせいもあってまだ市内を散策できていないので、少しばかり市内を歩いてみるのもいいかもしれない。いずれにせよ、グリーグ博物館の訪問が今から楽しみだ。2017/8/14(月)

No.76: Necessity to Coexist with Nature

Nature always invigorates me. I woke up today by a sweet-sounding whisper of a tiny bird. I would have felt horrible if I had woken up by an alarm clock. It has been almost 12 years since I quit using it.

Our life is saturated with superfluous unnecessary artifacts that exacerbate the quality of life. How fabulous and delightful to wake up by a mellifluous voice of a bird is. Monday, 8/21/2017

1432.【北欧旅行記】エドヴァルド・グリーグ博物館へ向けて

エドヴァルド・グリーグ博物館へのバスツアーに参加するために、そろそろホテルを出発しようと思う。バスはベルゲンの観光スポットの一つである魚市場の観光案内所から出発する。

今日もホテルの朝食を十分に食べた。相変わらずノルウェーのサーモンの新鮮さには舌鼓を打ち、このレストランの素材にこだわった朝食には本当に満足である。朝食があまりに美味しいため、昨日からランチボックスを購入し、それを夕食に食べることにしている。今朝もランチボックスを購入し、自分の好きなものを詰めた。

昨日に感じていた身体のだるさは随分と良くなったが、まだ完全に回復したとは言えないようだ。その影響は精神にも及んでおり、自分の言葉がなかなか滑らかに出てこない。思考が鈍重な感じがやはりしている。そこから改めて、身体の調整がいかに重要かに気づかされる。「体は資本」と言われることがあるが、資本などと表現してはならないほどにそれが重要なものであることを思い知らされる。

今日も無理をせず、グリーグ博物館から市内に戻ってきたら、人混みを避け、ベルゲンの自然を堪能できる場所をゆっくりと散歩しようと思う。まさにムンクが身体と精神の療養を図るために自然の中で生活をしていたように、自然の治癒力に預かりたいと思う。

今朝は過去の日記を読み返し、日記というのはその瞬間のその場限りの思考や感覚などを記録していながらも、それが未来の自分へ宛てた手紙のような役割を果たすことがあることに気づいた。あるいは逆に、日記は未来の自分から送られた手紙としての役割を担うことがある。

日記を日々の出来事の記録にとどめるのではなく、それが一つの学術的・芸術的な意味を持つ表現形式になりうるのではないかということをここしばらく考えていた。そんな折にムンクが執筆していた日記と出会うことによって、日記が持つ表現形式としての新しい側面が見えてきたのである。つまり、日記というのは、未来と現在を繋ぐ媒介手段であるのと同時に、学術的・芸術的な表現形式になりうるということである。私が執筆したい日記というのはまさにそのような性質を帯びたものである。

それはとりわけ観念的・感覚的なものであり、自らの仕事のための実験的な役割を担ってくれるものなのだ。日記を起点に学術活動と芸術活動に打ち込み、日記そのものがいつか学術作品と芸術作品に昇華される日に向けて今日も歩みを進めたい。

さぁ、これから「妖精トロールの住む丘」と形容されるトロールハウゲンにあるグリーグ博物館に向けて出発したい。今日という日がまた新しい一日であり、希望と幸福に満ちた日であることを望む。
2017/8/14（月）

No.77: Gamification and Learning Addiction

To gamify learning music theory boosts the progress of my learning. I spent many hours today to learn music theory, but I do not have any fatigue. On the contrary, I am addicted to learning music theory.

Friedrich Schiller, a German poet, proposes that humans can attain their true humanity when they play. Playing is a secret of addition to learning in a positive sense. Monday, 8/21/2017

1433.【北欧旅行記】エドヴァルド・グリーグの熱量に引き寄せられて

エドヴァルド・グリーグ博物館に訪れることができたこと、そしてグリーグというノルウェーを代表する作曲家の思想と生き方に触れることができたこと。それらはどちらも今回の北欧旅行を語る上ではなくてはならないものであり、今日の感動を忘れることはないだろう。

ベルゲンの魚市場近くの観光案内所から予定通りにバスが到着し、市内から10kmほど南下したトロールハウゲンに向けて出発した。バスは満席となり、このツアーの人気の高さを物語っていた。バスで博物館に向かう最中、バスのガイドを務めてくれたノルウェー人の青年が、グリーグに関する歴史を語ってくれた。私はガイドの話に耳を傾けながら、バスの窓から見える景色をぼんやりと眺めていた。

ベルゲンの漁港とその背後に広がる小高い山、そして山の中腹に建てられた色彩豊かな家々に、私は目を奪われていた。コペンハーゲンやパリの街を訪れた際、二つの街が持つ歴史的・文化的な硬質さに圧倒される瞬間が少なからずあったことを以前述べた。そうした硬質さは、歴史的・文化的な密度と形容して差し支えなく、両者の街が備え持つ偉大さだと言ってもいいだろう。しかし、私はコペンハーゲンやパリで生活をすることはできないという思いを持っている。なぜなら、歴史的・文化的に凝縮されたものに自らが窒息してしまいそうになるからだ。

ベルゲンの街が持つ歴史も、コペンハーゲンやパリが持つそれと引けを取らない。しかし、この街は自分が求めている生活のあり方に近いものを宿している。私は決して、ベルゲンの街に歴史的・文化的な密度が無いと言っているのではない。むしろ逆に、ベルゲンはそうした密度を持っている。

だが、その密度の体現のされ方がコペンハーゲンやパリとは異なるのだ。今はただ、それらの都市が同程度に凝縮された密度を体現させながらも、それでいて異なる感覚を私に引き起こすとしか言えない。

おそらく、人間の精神が高みに向かうことを通じて蓄積されていった歴史的・文化的な堆積物と、海と山という自然が調和しているということが、この街で生活を営むことのイメージを私にもたらしてくれるのかもしれない。

風光明媚なこの街が持つ景色を眺めながら、バスは目的地に向かってゆっくりと進んで行く。ガイドの青年の話で印象に残っているのは、グリーグは幼少の頃に学校を嫌っており、とにかく音楽を学びたいという衝動を抑えることができなかったということだ。微笑ましいエピソードとして、グリーグは雨の日を喜び、学校に向かう最中にわざと傘をささずにずぶ濡れになり、そのような濡れた格好では授業を受けることはできないため、教師から家に戻ることを毎回命じられていたようだ。

自宅に戻ったグリーグは、嬉々として作曲やピアノの演奏に打ち込んだそうだ。思うに、人が何かを学ぶということや何かを極めるということにおいて、グリーグが取った行動は最も純粋なものなのではないだろうか。

グリーグを自宅に帰し、再び学校に戻ってくることを強制しなかった教師はとても偉大な教育者であり、学校に行かずに自宅に戻って音楽に打ち込むグリーグを責め立てることをしなかったグリーグの両親は偉大であった。そのようなことを思う。

実は、ベルゲンにゆかりのあるノルウェーの作曲者はその他にも、ハラール・セーヴェルーやオーレ・ブルなどがいる。グリーグ博物館と同様に、ベルゲン市内から彼らの博物館に行くツアーが組まれているのは確かだ。しかし、今回の滞在において時間的な余裕がありながらも、私はなぜだが、グリーグの博物館だけを訪れることを決心していた。その理由はやはり、グリーグが幼少期の頃から持っていた熱量にあるのではないかと思う。

それは作曲とピアノの演奏に全てを捧げた魂の熱量だ。それが私を引き寄せ、彼が生活と音楽活動を営んだ場所に私を導いたのだと思う。

© YOHEI KATO 2018

バスが市内を離れ、気付かない間に、小さなフィヨルド地帯と静かな森林地帯が目の前に広がり始めた。どうやら私は、グリーグに霊感を与え続けた場所に到着したようだ。2017/8/14(月)

No.78: Diversity of the Beginning and the End

The beginning is diverse, and the end is various.

Whenever I keep a diary, the beginning and the end are always variegated. The fact is quite astonishing to me. As I mentioned previously, the diversity of the beginning and ending could be related with autopoiesis. Not only a diary but also my existence repeatedly generates itself.

Yet, a new creation is always slightly different from the previous one. That is a secret to the variation of the beginning and the end. I found that it was also true to music; a song has a unique beginning and ending. Monday, 8/21/2017

1434.【北欧旅行記】「妖精トロールの住む丘」に建つエドヴァルド・グリーグ博物館より

この世界に存在する表現物の中に、二種類の不要物がある。それは、客観性だけを追求するものと主観性だけを追求するものだ。残念ながら、どちらの表現物も向き合うに値しない。前者の表現物の無価値さは、知識や概念というものが、本質的には主観性を追求した先に現れる普遍性を体現したものであるということを見落としていることに起因する場合が多い。

一方、後者の無価値さは、感覚や体験というものが、本質的には客観的な普遍性に到達しうるということを見落としている場合に生じやすい。客観性という名の下に、血も肉も感じられない主観性の欠如した表現物ほどつまらないものはないだろう。逆に、主観性のみを追求する表現物が、ことごとく独りよがりなものに陥り、それが人類共通の遺産にまで昇華していかない姿ほど痛々しいものはないだろう。私が一切認めたくないのは、美の欠落した真であり、真の欠落した美だ。

バスを降り、「妖精トロールの住む丘」と称されるトロールハウゲンの森の中を歩いている最中、真と美を追求し、さらにはそれらを善を包摂したものに具現化していく試みを、これからの一生の仕事の中核に据えることにした。その試みにそぐわないことは一切せず、その試みに合致するものだけに従事していく。そのようにしか生きないし、そのようにしか生きることができないという強い思い。

内側に沸き立つ熱量で溶解死することができたら何と素晴らしいことだろうかという熱望感。自らの血で生み出された決意を持ちながら、私はグリーグ博物館の入り口に向かって森の中を歩いていた。

ノルウェー人のガイドの青年の後を30人ぐらいのツアー参加者がついていく。「妖精トロールの住む丘か。確かに妖精が住んでいそうな素晴らしい場所だ」という言葉が私の口から自然と漏れた。

博物館の入り口でガイドから説明があり、一向はまずエドヴァルド・グリーグとソプラノ歌手で妻のニーナ・グリーグが住んでいた家に向かった。そこは当時の面影を残したままであり、グリーグ夫妻の思い出の品や肖像画などが展示されていた。グリーグが演奏前の緊張を和らげるために常に手に握りしめていたという小さなカエルの人形を見つけた。グリーグに影響を与えたベートーヴェンやモーツァルト、ワーグナーやチャイコフスキーの肖像画を見つけた。

ガイドの説明のおかげで、当時のグリーグ夫妻の生活の様子や二人の音楽活動の様子を掴むことができた。30分ほどのガイドが終わると、自由行動の時間になった。

グリーグは一人の静寂な時間を愛し、そうした静寂さの中で作曲を行うために、作曲専用の小屋を建てた。グリーグの自宅から少し離れたところに作曲小屋がある。そこに向けて歩いている時、グリーグもこの山道を毎日歩いていたのだろうと思った。それは一つの静かな感動として自分の内側に流れた。

湖とそれを囲む自然を一望することができる赤い屋根をした作曲小屋が見えてきた。近づいて中を見てみると、とてもこじんまりとしており、作曲に不必要なものは一切置かれていなかったのだろうと想像させる。この場所でグリーグは、トロールハウゲンの自然の恵みを享受しながら作曲活動に励んでいたのだ。ノルウェーに訪れる前から少しずつグリーグの作品を聴いていたが、時に透明感に満ち溢れ、時に激しさに満ち溢れた楽曲は、自然の様々な側面からもたらされたものなのだと思う。

しばらく私はその場にたたずんで、作曲小屋とそれを取り囲む自然を眺めていた。辺りの自然から再び自己に意識が戻ったことを確認すると、私は来た道を戻り、博物館の中に入り、グリーグの自伝“My Grieg: A Personal Introduction to Edvard Grieg’s Life and Music (2014)”とこの博物館の解説書を購入した。特に自伝の資料的価値は素晴らしく、著者はこの博物館の館長を長らく務め

たアーリング・ダールである。後ほど気づいたが、館内にいたその他のガイドもこの自伝を読んでグリーグに対する理解を深めているようだった。

二冊の書籍と二つのしおりを購入し、昼食コンサートの会場に向かった。ここは博物館と隣接しており、中に入ると、ノルドオース湖を背にした演奏舞台がすぐに目に止まった。ピアノの後ろ側に開放的な窓があり、そこから作曲小屋とそれを囲む自然を一望することができる。ピアノに近い最前列に腰掛けてしばらくすると、今週の昼食コンサートを担当するピアニストのJoachim Kwetzinskyが舞台に現れた。

一斉に拍手が沸き起こり、彼の挨拶と最初の曲目の解説と共にコンサートが幕を開けた。奏でられるピアノの音がこの品の良いコンサートホール全体に響き渡り、音の流れがピアノの奥に広がる景色の中に溶け込んでいく。

演奏家の思想と力量、演奏環境、そして曲に耳を傾ける聴衆によって、音楽はその無限の可能性を解き放つのだということをつくづく思った。演奏家と聴衆が一つの集合意識を生み出し、それが環境と調和をなす時に、初めて感動的な演奏が生み出されるのだと思う。

演奏を聴きながら、自分の背筋に何度も感動の波が押し寄せた。これは非常に不思議な感覚だ。普段論文や専門書を読む中で得られるあの絵も言わぬ恍惚感とは全く別種の感覚が、感動的な音楽を聴く時に生じる。ここから私は、真を探究する際にもたらされる恍惚的な感動と、傑出した音楽が生み出す美的感動は異なるのではないかと思ったのだ。とりわけ、優れた音楽に内在された音の振動は、そのまま背筋を駆け上がるエネルギー的振動に変容しうる。これは感動的な音楽の持つ不思議さと魅力ではないだろうか。

そうした不思議さと魅力を体現していたのが、演奏曲の二つ『トロルの行進』と『トロールハウゲンの婚礼の日』だった。30分ほどの演奏が終わり、拍手喝采となり、昼食コンサートが静かに幕を閉じた。しかし、終わらない何かが自分の中を駆け巡っていた。2017/8/14（月）

【追記】

上記の日記の後半で述べているように、確かに真の探究がもたらす感動と、美がもたらす感動には差異を見つけることができるが、それらが共に感動という感覚質を持つ点においては、両者は多分に共通する性質を持つように思う。どちらの探究にせよ、それを突き詰めた先に得られる究極的な感動はもしかしたら「超越的な感動」という同一な感覚なのかもしれない。フローニンゲンに向かう列車の中：2018/9/15（土）15:19

No.79: Time

This morning is windless and tranquil. Gossamer clouds spread out in the sky. It looks like as if time has stopped. I began my today's work in the timeless world. Then, time has started to have wings to fly towards eternity. Tuesday, 8/22/2017

1435.【北欧旅行記】あるのは熱情、ただそれだけを持って最後の日まで

グリーグの作曲小屋とそれを取り囲む自然を眺めながらの昼食コンサートを終えると、コンサートホールを後にして、市内への帰りのバスまでの自由時間をトロールハウゲンの自然の中でゆっくりと過ごした。

グリーグが曲に込めたこの自然の恩寵を自分の感覚を通じて確かめるかのように、ノルドオース湖を見晴らすことのできる場所に私はたたずんでいた。しばらくしてから再び歩き出し、気が付けばグリーグ夫妻が眠る墓の前にいた。

木々が生い茂る崖に石碑が埋め込まれている姿を見たとき、これが墓だということにすぐには気づかなかった。よくよく注意をして見ると、そこに二人の名前が彫られていることがわかった。音楽をこよなく愛し、トロールハウゲンで多くの時間を過ごした二人の声が、辺りの木々の葉の静かな揺らめきとして聞こえてくるかのようだった。

バスの発車時刻が迫る。私はトロールハウゲンを後にすることにし、夏の新緑の香りが立ち込める小道を引き返すことにした。

ベルゲン市内に戻ると、天気が崩れかかっていた。ホテルに到着するや否や、突然激しい雨が降り始めた。どこか自分がまだ幻想の世界の中にいるような感覚が続いている。

ホテルのロビーでコーヒーを入れ、自室に戻るのではなく、しばらくロビーで日記を書き留めることにした。フローニンゲンにいた時にグリーグの全曲が収められたプレイリストをSpotifyでダウンロードしていた。しかし、それは11時間ほどに及ぶ長さであり、昨日改めて聞いていると音が飛んでしまう箇所がいくつかあったため、ホテルのロビーでパソコンを開き、改めてCDアルバムを七つほどダウンロードすることにした。

一番最初にダウンロードしたジャケットの表紙には日本人の若い女性が写っており、グリーグの曲とその女性との関係がいまいちわからず、それが少し気になったが、特に気にかけることもせず、曲を聴き始めることにした。その後私は、博物館で購入したグリーグに関する自伝と博物館の解説書を食い入るように読み始めた。ふと顔を上げ、激しい雨が相変わらず降り続く様子を見たとき、先ほど昼食コンサートで聴いた『トロルの行進』がパソコンから流れ始めた。

その演奏に静かに耳を傾けていると、この曲を演奏するピアニストのことが気になり、調べてみることにした。演奏者はAlice-Sara Ott（アリス＝紗良・オット）というピアニストであり、CDのタイトルは“Wonderland: Edvard Grieg Piano Concerto, Lyric Pieces”である。そして、先ほど疑問に思っていたCDの表紙を飾る女性が当人であることがわかった。そこから『トロルの行進』と『トロールハウゲンの婚礼の日』を何度か繰り返し聞いた。

ホテルのロビーから見えるベルゲンの山々とその中腹に建てられた様々な色をした家を、何も考えることなくただ眺めていた。明日の昼前にフローニンゲンに戻ることについてぼんやりと思いを巡らせる。

オランダで過ごした一年間の中で積み重ねてきたものを尊重しながらも、全てをもう一度やり直そうという気持ちになった。このままでは何も自分の仕事を残すことができないという実存的かつ霊的な危機意識が、ベルゲンの空を覆う雨雲のように立ち込める。

激しい雨の中を身一つで歩き続けれるような強靭な精神が欲しいと強く思う。根底から、根本から、根幹から全てを仕切り直さなければならない。それができなければ、自分に明日はやってこない。

© YOHEI KATO 2018

だが、それができれば、きっと明日はやってくるはずだ。ただそれだけを信じて、明日からの人生を、そしてオランダでの二年目を過ごしたいと思う。

自分が歩む道すら見ない。この世界での最後の一日に、いや、自分がこの世界からいなくなった後に、初めて自分の道が何であったかがわかればそれでいい。今この瞬間に降り注ぐ激しい雨を全て蒸発させ、分厚い雨雲を突き破るぐらいの熱情を持って、明日から最後の日に向けてただひたすらに歩いていく。自分にはそれしかできない。2017/8/14(月)

No.80: Simplicity and Beauty

After I emulated a piece of music of Bach, the simplicity of the music that can generate ultimate beauty was astounding to me. Probably, every Bach's music is a crystallization of simple but sophisticated components. I witnessed the moment when simplicity leaped into unimaginable beauty. The moment could be discontinuous, which can be called a "creative quantum leap." Tuesday, 8/22/2017

1436.【北欧旅行記】ベルゲンでの最終日の朝に

ベルゲンでの四日目の朝を迎えた。今日はいよいよベルゲンを離れ、オランダに戻る日だ。

朝食をゆっくりと摂り、ホテルで少しくつろいでからベルゲン空港に向けて出発したい。今回の北欧旅行は、本当に充実したものだった。

今回の旅を通じて考えさせられたことや得られた感覚などについては、フローニンゲンに戻ってからゆっくりと言葉にしていくことになるだろう。今はまだ流入した思考や感覚が自分の内側で渦巻いている状態であり、それが静かに自己の存在の底に降りていく頃を見計らって、改めて文章として旅の振り返りをしていきたいと思う。

今回の旅の最中、自分の意識状態が日常とは随分と異なっているように思えることがあった。端的には、夢の中の夢にいるような感覚が続き、それでいて自己を超越的な視点から絶えず眺めているような状態が継続していた。それは街中を歩いている時にも、ホテルの中にいる時にも継続する意

識状態だった。旅を日常の延長線上に捉え、日常とひとつながりの連続的なものと認識しようとしても、意識状態は嘘をつかない。

やはり旅は、日常の意識状態から非日常意識に私たちを誘う力を持っている。おそらくそこに旅の一つの醍醐味があるだろう。

私たちは非日常意識に置かれることによって、日常をまた別の視点から捉え直すことを余儀なくされる。そこでは小さな気づきがもたらされるかもしれないし、ハッとするような大きな気づきがもたらされるかもしれない。これまでの生き方やあり方、そして発想や認識の枠組みそのものを捉え直すような気づきをもたらしてくれるのが、そうした非日常意識であり、それをもたらしてくれるのが旅なのだ。

この世界には様々な精神修練方法が存在し、それらを実践することによって日常生活の中で非日常意識に参入することは十分に可能である。だが、旅においては自らの身体を日常とは全く別の環境の中に置くことを余儀なくされ、それによって、時にそうした精神修練方法を凌ぐような意識の変容作用がもたらされるように思う。

この文章を書いている今もまだ非日常意識の状態が続いているようだ。今夜から再びフローニンゲンでの生活が始まる。

振り返ってみると、この旅を通じてエマーソンの思索的エッセイやムンクの画集やグリーグの自伝など、普段自分が目を通している科学的な論文や専門書とは随分と異なる文章に触れていたように思う。コペンハーゲン、オスロ、ベルゲンの各地に固有な環境と相まって、こうした文章を読みながら旅を進めていたことも、自分を非日常意識の中に深く参入させることに一役買っていたのかもしれない。今回の旅で購入した文献はどれも思い出に残るものになるだろう。2017/8/15（火）

No.81: Music Composition Like Solving a Puzzle

My progress of learning music theory for music composition is going well. To analyze and compose a piece of music is like solving a puzzle, which is intellectually and aesthetically

pleasurable. The more I learn typical chords, the more I notice the inchoate progressions of my chords.

My desire is to transform my farfetched and contradictory ideas into a piece of harmonious music.
Tuesday, 8/22/2017

1437.【北欧旅行記】エドヴァルド・グリーグとエドヴァルド・ムンクの共通点

エドヴァルド・グリーグとエドヴァルド・ムンク。この二人のエドヴァルドと出会えたことは、今回の北欧旅行がもたらしてくれた最大の恩寵であった。この二人の思想や仕事について、書き留めたいことが山ほどあり、私が二人のどういった点に多大な感銘を受けたのかをまた改めて書き留めておかなければならないだろう。ムンクが「文芸日記」と呼ぶ日記を執筆し続けていたことは以前に言及した。

昨日グリーグ博物館に訪れた際に、なんと作曲家のグリーグも日記を書く人物だったということがわかった。グリーグもムンクも、大量の文章を書く人だったのだ。

前者は作曲家であり、後者は画家でありながらも、両者が共に大量の文章を書いていたという共通点はとても興味深い。以前から日記の持つ意義やその表現形式としての可能性と不思議な力についてあれこれと考えを巡らせており、今となってはグリーグとムンクの二人が日記を絶えず執筆していたということはとてもうなづける。

グリーグは音楽言語を通じた作曲の創作と自然言語を通じた日記の執筆に絶えず従事し、ムンクはイメージ言語を通じた絵画の創作と自然言語を通じた日記の執筆に絶えず従事していた。二人の偉大な芸術家は、二つの異なる表現形式を絶えず行き来していたのだ。

自然言語にならないものを彼らの主たる芸術言語で表現し、彼らの芸術言語をさらに彫琢していくために、自然言語による日記の執筆があったのだと思えてしかない。自分に置き換えて考えてみると、論文には自然言語でありながらも学術言語という特殊な表現形式があり、それは日記とはやはり異なる言語体系だと言える。そうしたことからも、自分にとって論文と日記を絶えず執筆していくと

いうことは、グリーグとムンクが実践していたことと同じ意味を持つように思える。もう一つ、グリーグに対して大きな共感を持った点に言及しておきたい。

それはグリーグの「バッハやベートーヴェンなどの芸術家は頂点を極め、教会や神殿を造った。私は、イプセンが自分の戯曲で表現したように、人々がくつろぐことができ、幸せに感じられる家を造りたかった」という言葉の中に全てが集約されている。

少し前から一者と多者の関係について何度か取り上げていたように思う。欧州での生活が始まって以降、自分の中で一者に向かう上昇的な衝動がより一層強まっていたのは確かである。実際に、ライプツィッヒのバッハ博物館を訪れ、ウィーンのベートーヴェン博物館に訪れることによって、バッハやベートーヴェンが持っていた一者に向かう愛（エロス）に基づく構築物に対して大きな感銘を受けたのは事実である。

一方、そうした一者に向かう愛のみではなく、多者に向かう愛（アガペー）の重要性をここ最近強く感じている。グリーグの言葉に表れているのは、まさにアガペーの本質に他ならないように思える。

これからも私は、一者に向かうことを止めはしないだろうが、多者に向かう道をより真摯に探求することになるだろう。論文、日記、作曲を通じて、一者と多者の双方に向けた表現活動に全身全霊を注ぎたいと思う。2017/8/15（火）

No.82: The Uniqueness of Each Individual Mind

Ralph Waldo Emerson had an insight about the uniqueness of each individual mind. Our minds have distinctive qualities and characters, and thus the way to cultivate our minds cannot be reduced to one method.

The method should consider the diversified nature of our minds. I am concerned about the current education in that it tends to neglect the uniqueness of each individual mind.
Wednesday, 8/23/2017

1438.【北欧旅行記】コペンハーゲン空港から：自由自在な作曲へ向けて

ベルゲンを出発し、コペンハーゲンに到着した。早朝のベルゲンは小雨が降り注いでいたが、コペンハーゲンは快晴である。時刻は夕方の四時半を回り、もうそろそろしたらフローニンゲン行きの飛行機の搭乗が始まる。当然ながら列車の移動は旅の趣きがあり、移動中の景色を堪能できるという点において優れている。

しかし、旅から帰る際は、やはり飛行機の方が楽だと感じる。コペンハーゲンのラウンジで随分とくつろぐことができ、今日はゆっくりと自宅の浴槽に浸かれば、明日からまたこれまで通りに自分の仕事に打ち込むことができるだろう。

今回の北欧旅行を通じて、論文という自分の作品創出と日記を執筆するということをより本格的に行っていきたいという思いが強くなった。論文に関しては言うまでもなく、日記に関してもその表現形式が持つ可能性をより深く探求する必要があるだろう。両者のうちどちらか一方を通じて表現活動を行うのではなく、両者には異なる人称言語と言語表現が求められるため、開示される知や感覚が必然的に異なったものになる。そのため、どちらか一方が欠けてしまっては、自分の探究が真に深まっていくことはないように思えてくる。

それぐらいに両者の表現形式は重要だ。さらに、オスロのムンク美術館を訪れたあたりから、自分の思考と感覚を作曲を通じて自由自在に表現できるようにしたいという強い思いが改めて湧き上がってきた。そして、その思いを決定的なものにしたのは、ベルゲンのグリーグ博物館だった。作曲をあたかも論文を執筆するかのように、日記を綴るように自由自在に行いたい。

日記の文章を綴るかのような作曲と論文の文章を綴るかのような作曲の双方が実現される日が来ることを望む。さらに望むことは、論文と日記と作曲だけに従事する生活を実現させたいと強く願う。それ以外には何も望むことはなく、それ以外には何もする必要はないのである。究極的なまでに自分のために仕事をし、究極的なまでに人類のために仕事をしたいのだ。

全ての人間が個人的かつ社会的な生き物であるなら、なおさらそうした生き方を追求したい。それに合わせて、生活場所と仕事場所をそろそろ吟味しなければならない頃にあるように思う。一旦どこ

かに落ち着いてもいい頃かもしれない。人と社会に向けて仕事をするのであれば、人と社会から離れた場所で生活と仕事を形作っていかなければならない。

仮に日本に向けて仕事をするのであれば、日本ではない場所で生活と仕事を進めていかなければならない。これは一つの覚悟に近い。

絶対に聞かなければならない声と絶対に耳を傾けてはならない声がある。絶対に聞かなければならない声は、自分の魂の声であり、その声と共鳴するごくごく一部の人たちの声である。一方、絶対に耳を傾けてはならない声は、その他の無数の人たちの声である。

自分の内側の声に耳を傾けてみる。すると、生活と仕事を営む場所のイメージが、意識の奥底から静かに浮上してきた。それは欧米の学術都市であり、街の中心ではなく郊外のイメージだった。大学まで徒歩で行ける距離に一軒の家を購入している。そんなイメージが自分の深層意識から湧き上がってきた。

落ち着いた場所に拠点を定め、そこで生活と仕事を形作る日々が近いことを知る。コペンハーゲン空港上空の太陽が、そうした日々の実現に向けた道を作ってくれているかのように映る。その道を通り、これからフローニンゲンに戻り、また新しい日々を始める。2017/8/15（火）

【追記】

上記の日記を読んでみて、この北欧旅行の前に訪れたザルツブルグでの啓示的メッセージが、ノルウェーの地で開花したのだということを知る。その年の春にザルツブルグを訪れ、自分が作曲家「である」というメッセージを受け取って以降も、それをどこか信じることができずにいた。しかし、ノルウェー、とりわけグリーグ博物館を訪れることによってそれが確信に変わったのだということを改めて知った。よくよく考えてみると、ザルツブルグにせよ、ベルゲンにせよ、それらは旅を通じて訪れた場所であり、それらの旅がなければ、今毎日作曲をしている自分は存在しなかったのだと思う。旅は本当に人を変える力を秘めているようだ。私たちの人生は変容の旅であり、人生の最中に行う諸々の旅を通じて、私たちの人生はより一層豊かなものになっていく。フローニンゲンに向かう列車の中：2018/9/15（土）15:40

No.83: Various Approaches for Music Composition

I am experimenting various approaches for music composition. For instance, I sometimes determine a melody line first, whereas I sometimes decide a chord progression first. Also, my composition occasionally starts with a music theme.

Since diverse composition approaches are beneficial to preventing composition from being monotonous, I will continue to experiment diverse approaches. Wednesday, 8/23/2017

1439.【北欧旅行記】北欧旅行の帰路に思うこと

昨夜無事にフローニンゲンに戻ってきた。コペンハーゲン空港からフローニンゲン空港に向かう飛行機はとても小さく、初めて乗るような大きさだった。飛行機の乗り場も空港内の辺鄙な場所にあり、それはコペンハーゲンからフローニンゲンに向かう乗客の少なさを物語っていた。機内は確かに狭いのだが、乗客が少ないためか、比較的快適に過ごすことができた。

飛行機がフローニンゲンに到着する間際に、忘れることのできない美しい光景を目にした。機内前方の窓側の席に腰掛けていた私は、着陸準備に入った飛行機の窓から何気なく外を眺めると、絵も言わぬほどの自然の美を目撃した。

フローニンゲンに張り巡らされた運河が夕日で黄金色に光っていたのだ。飛行機の動きに合わせて夕日の照射角度が変わり、飛行機の進行と足並みを合わせるかのように、運河が黄金色の輝きを見せ続けていたのである。それは眩しいほどの光であり、運河がどこまでも続く黄金の道のように思えた。それは息を飲むほどの美しい光景だった。ノルウェーでも感じたが、自然の美は本当に偉大である。

飛行機がフローニンゲン空港に到着した。この空港を使うのは今回が初めてであり、やはりとても小さな空港だった。機内から階段で飛行場に降りた瞬間、牧場の香りが漂ってきた。この香りは時に、自分の自宅近辺でもするものである。それは全く嫌な匂いではなく、むしろ懐かしさとともに、自分が自然の中にいることを思い起こさせてくれる香りだと言える。

空港からフローニンゲンの中央駅までバスで移動し、そこから歩いて自宅に帰った。歩いている最中、やはりこの街は今の自分にとっての心休まる大切な場所なのだということに気づく。

ふと、次の日からの仕事について考えを巡らせていた。特に作曲に関して、日本の俳句や短歌をイメージした簡潔ながらも豊穣な意味や情感、そしてストーリーが盛り込まれた曲を作っていこうという意思を持った。長くても三分以内の短い曲をいくつもこれから作っていく。これもまた一つの決心である。

エドヴァルド・グリーグが、バッハやベートーヴェンが残した教会や寺院のような高貴な建造物的音楽を尊敬しながらも、自身は万民の心が休まる家のような音楽を作ろうとしたように、私も人間に普遍的なものを常に主題にしたいと思う。

人が誰しも経験するであろう出来事を通して得られる情動を音楽として表現したい。人間に普遍的なものを表現していくというのは、作曲のみならず、今ここで書き残されている個人的な日記においても体現されるべき事柄である。2017/8/16（水）

No.84: Distorted Time in Our Modern World

Time in my surrounding passes at a leisurely pace everyday. The rhythm of time that I feel now makes me relaxed. It even fosters my development at a proper speed. On the other hand, I often feel that the speed of time in our modern world is incredibly and ludicrously fast. The rapid speed of time obviously contradicts the rhythm of our natural development. In fact, the distortedly fast rhythm of time in the modern world stymies our development. Wednesday, 8/23/2017

1440. 複数の表現形式で自己を著述し続けること

北欧旅行からフローニンゲンに戻ってきての初日が終わりに差し掛かっている。今日は午前中に洗濯などをし、少しばかり北欧旅行についての日記を執筆していた。しかし、再びフローニンゲンでの生活を始めるにあたって諸々のことを行っていると、あっという間に一日が過ぎた感じがする。九月からのプログラムに関する授業料について質問があり、午後から学生支援課に足を運んで以降は、自宅に戻ってからも何かと事務的な手続きを行っていた。

そのようなことをしていると、書籍や論文を含めて自分の仕事をする時間的な余裕がないままに一日が終わろうとしているという感じだ。幸いにも、事務的な事柄の大部分を今日中にこなすことができたので、明日から再び本格的に自分の仕事に取り掛かれそうであり、一安心している。

今回の北欧旅行を通じて、ラルフ・ワルド・エマーソン、エドヴァルド・グリーグ、エドヴァルド・ムンクの三人の人物の仕事に深く触れることができたことは、何よりの幸運であった。それは今回の旅の大きな恵みであったとも言える。

明日以降もしばらくは、これら三人の仕事についてあれこれと考えることが多いだろう。彼らの仕事の業績を考えてみれば、そこから汲み取れることの豊かさは多大なものであることが一目瞭然であり、時間をかけて彼らの仕事と向き合うことが大事になるだろう。

彼らの仕事については書きたいことが山積みとなっており、どこから着手していいのかわからないほどである。そのような状況に現在は置かれているが、焦ることなく、着手できるところから彼らの仕事を通じて考えたことを文章に書き留めておきたいと思う。

フローニンゲンの幻想的な夕方の空を久しぶりに眺めている。薄い赤紫色の空が広がり、それを見ていると本当に心が安らかになる。やはりこの街は自分の故郷の一つになっている。

今日の日中に街の中心部を歩いていると、なんと心が穏やかな状態でこの街に存在できるかを有り難く思った。行きつけのチーズ屋の店主との会話が、この街に帰ってきたという感覚を強めた。

ムンクについて思いを巡らせてみた時、彼に影響を与えたノルウェーの自然誌家ハンス・イエーガーについて言及をしなければならないだろう。ムンクに多大な影響を与えたイエーガーの言葉の中でもとりわけ、「自らの人生こそを著せ」という言葉は深く響いた。

イエーガーのこの言葉を受けて、ムンクは絵画作品を通じて自分の人生を著しただけではなく、実際に日記を執筆することを通じて自身の人生を絶えず著し続けたのである。イエーガーの言葉とムンクの実践が、今の私の取り組みの方向性の正しさを裏付けてくれるかのようであり、とても大きな励ましを受けた。

© YOHEI KATO 2018

ムンクは、日記の執筆と絵画の創作を通じて、自己を絶えず著述し続け、自らの経験と魂に真摯に向き合い続けた。そうした自己の経験と魂との絶えざる対話と記録によって、表現するべき対象の発見と同時に、作品創出のインスピレーション（霊感）を得ていたのである。

そうなのだ。自己を著述することが目的なのではなく、自己著述を通じて、それを創作という表現活動につなげていくことが何より大切なのである。ムンクが絶えず作品を作り続け、絶えず日記を執筆し続けたのと同様のことを自分も行いたい。

エマーソンにとっての表現形式は、詩の創作とエッセイや日記の執筆であり、グリーグにとっては、作曲と日記の執筆であった。この世界に絶えず自己の表現物を創出し続けた偉人たちは皆、芸術言語と自然言語の双方で自己を著述し続けていたのだ。これに気づいた時、私の魂は感動のあまりに打ち震えていた。明日からもまた、複数の表現形式をもって自己を著述し続け、この世界に自己の表現物を創出し続けたい。2017/8/16（水）

No.85: A Surprise and Learning

As Charles Sanders Peirce points out, all inquiries stem from a surprise.

Whenever I ask myself, I feel that a revelation about myself drives my inquiry. According to the same logic, learning should proceeds from a surprise. A surprise creates a necessary discontinuity for learning. Learning could be to fill up such a gap and to generate a new discontinuity by a surprise. Wednesday, 8/23/2017